

## 論文

# 霜田史光研究落穂拾い（その1）

竹 長 吉 正

Supplements to the Research Work of Shiko SHIMODA ( I )

TAKENAGA Yoshimasa

キーワード：エリザベス・アプタン、日本工科学学校、星野寿恵、少女小説「詩人の妹」、  
石井桃子、浦和高等女学校

### 全体の構成

はじめに

- (1) ペンネーム史光の読み方
- (2) エリザベス・アプタン
- (3) 日本工科学学校
- (4) 史光の妻寿恵
- (5) 史光の少女小説「詩人の妹」
- (6) 一少女の眼に映った史光
- (7) 石井桃子と校友会雑誌

## はじめに

この論考は、わたくしの霜田史光研究の落穂拾いである。霜田史光研究は確かに、わたくしの長年のライフワークである。これまで資料を発見・発掘し、二冊の著書にまとめたが、それでもまだまだ残した仕事がある。研究とは永遠に続くものであり、これで成し終えたという場合が、ほとんどない。新しい資料がどんどん見つかり、それらを整理し、評価・価値づけをしているうちに、どんどん時間が過ぎていく。

一人の人間として、体力・視力の限界もあり、これ以後の研究は後進の研究者にバトンタッチするほかはないと思うようになった。わたくしがこれまで収集した資料も、どこか誠実な施設（図書館・文学館）に寄贈するほかはないと考えている。

本稿では、わたくしの二冊の著書以後、手元に集まった資料をもとに、霜田史光研究の補遺を行う。

まずは、ペンネーム史光の読み方と、伝記的な研究の補遺から始める。

### (1) ペンネーム史光の読み方

霜田史光は本名を平治（へいじ）と言い、史光はペンネームである。史光は、いったい、どう読むのが正しいのであろうか。

種々、辞典・事典の類を調べてみると、「しこう」以外に、「のりみつ」としているものがある。また、霜田を「しもた」としているものもある。

わたくしの長年の調査から、ここで重大な発表をしておきたい。つまり、これから出版する本、あるいは、インターネットで流す情報は、これに従わなければならないという重大な発表である。

結論から先に言うと、霜田は「しもだ」、史光は「しこう」と読むべきであり、これが正しいということである。

その根拠を幾つか、以下に挙げる。

第一に、吉川英治・霜田史光『寛永武鑑 本伝御前試合』（講談社 1997年9月）という本がある。その「解説」で尾崎秀樹が引用している『新撰 大人名辞典』（平凡社 昭和12年10月＊初版第1刷）である。わたくしは尾崎氏の文に注目し、その『新撰 大人名辞典』第三巻を見た。その336ページに、「しもだ しくわう」と出ている。「しくわう」は旧仮名遣いであり、新仮名遣いでは「しこう」となる。『新撰 大人名辞典』の「霜田史光」の項目の執筆者の名前は出ていなかったが、霜田史光の項目を執筆した人は、同時代人として史光の呼び名を知悉していたと考えることができる。

第二に、堀口大学・吉田精一・中野重治監修、現代詩辞典編集部編『現代詩辞典』（飯塚書店 昭和26年5月）という本がある。この本には、「しもだ・しこう」と出ている。この本は全体的に誤植の多い本だが、史光に関する呼び名は間違えていないと判断する。

第三に、史光の血縁者による証言である。このことに関しては拙著『霜田史光 作品と研究』（和泉書院 2003年11月）の117ページで引用した田島義雄氏（児童演劇の作家、批評家）、及び拙著『評伝 霜田史光』（日本図書センター 2003年9月）の8ページで引用した霜田光一氏（東京大学名誉教授、物理学専攻）から共に、叔父さんの名（ペンネーム）が「しもだ・しこう」であることを確認している。

それなのに、なぜ、「しもた・のりみつ」という呼び名が一般に流布したかについては、日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第2巻（講談社 1977年11月）の「しもた・のりみつ」が影響している。わたくしはこの事典を個別攻撃するつもりはないが、有名な事典であっても、疑いの眼をもって精査する必要があることを、世の人々に伝えたいと思う。

この件に関しては最近、執筆者の石崎等氏から丁寧なお手紙をいただいた。「依頼した人から執筆不能ということで返却された」事項、当時（この事典を製作中の頃）は霜田史光についてはほとんど、確かな資料がなかったもので、執筆者は皆困っていたのである。石崎氏は近代文学の研究家であ

るが、近代詩史の専門ではない。早稲田大学の稲垣達郎、紅野敏郎などという大先生の下で大学院生など若い研究者が「原稿締め切りに追われて」「何人かで急遽手分けして」「倉卒の間に仕上げ」ざるを得なかった事情というものがあつた。『文藝年鑑』や当時流布していた詩史などを参考にしたが、「しもた・のりみつ」と記した文献を今、これだといって明示することはできない、との返事をいただいた。

わたくしも日本近代文学の研究者として明治、大正、昭和戦前の雑誌や新聞を見る機会が多くある。そこで気づくのは、誤植・誤記の多さである。執筆者の名前は編集者がルビを振る。執筆者の名前をよく知らない編集者が勝手に、読みルビを付ける場合が無きにしもあらずである。その一つとして、霜田史光を「しもた・のりみつ」とした文献（雑誌・新聞）があつたのではなからうか。石崎氏はそれを見て、霜田史光を「しもた・のりみつ」としたと考えることができる。

それにしても、石崎氏がもし、『新撰 大人名辞典』や『現代詩辞典』に目を通し、また、霜田史光の血縁者にも会っていて、この事典の項目を執筆していたならば、このようなミスが起こらなかったのは確かである。

わたくしは石崎氏を責める前に、我が身を振り返りながら自分も他のことでこのようなミスを犯さなかつたらうかと深く反省する。

ともあれ、真実は伝わり、誤りも伝わる。大きな出版物、影響力の大きい本は、特にこの点、注意を要する。また、インターネット社会においても同じことが言えるのであるから、お互いに注意をしようと呼びかけたい。

## (2) エリザベス・アプタン

エリザベス・アプタン、正確にはエリザベス・フローラ・アプタン。彼女の名前が埼玉県の郷土雑誌『蒼空』<sup>あおぞら</sup>に出てくる。詳しく言えば、同誌の第2巻第4号（大正8年4月）第2巻第5号（大正8年5月）で、前号には「FAITH」と題する英語の詩、後号には「信仰」と題する日本語訳の

詩が載っている。

エリザベス・アプタンとは、どのような人物なのか、また、この人が霜田史光など蒼空社同人たちと、どのような関係があったのか。

いろいろと調べていくうちに、次のようなことが明らかになった。

まず、インターネットによる情報である。「埼玉・ゆかりの偉人」というデータベースがあり、そこには次のようなことが記されている。

エリザベス・フローラ・アプタン（Elizabeth Flora Apton）は1880年（明治13）、アメリカ合衆国メイン州に生れた。1908年（明治41）、アメリカ聖公会の宣教師としてキリスト教の日本伝道を志して来日。埼玉県はつかりの川越、浦和、大宮、熊谷などの各地で伝道活動を行う。川越の初雁幼稚園、熊谷の熊谷聖公会堂幼稚園などの園長を務めた。また、幼児教育者（\*今日いうところの保育士・幼稚園教諭）の養成にも力を尽くした。晩年は埼玉県もろやまの毛呂山町に住み、教会礼拝堂を建立したり、幼稚園を設立したりした。1966年（昭和41）、86歳で亡くなった。

中村稔の『私の昭和史』（青土社 2004年6月）に、「愛仕幼稚園とアプタン先生のこと」と題する一節がある。

「私は四歳の時から二年間愛仕幼稚園という幼稚園に通った。」と中村は言う。

1927年（昭和2）1月生まれの中村が愛仕幼稚園に通ったのは、1931年（昭和6）4月から1933年（昭和8）3月までである。

ところで、アプタンは埼玉県内の各地に住んでいるが、1911年（明治44）、浦和に住み、浦和幼稚園（\*その後、麗うらわ幼稚園と改称）を設立した。その四年後、すなわち1915年（大正4）アプタンは大宮に移住し、最初の愛仕幼稚園を設立する。しかし、その翌年（1916年）、一年間、アメリカに戻って保母養成の勉強をする。1917年（大正6）再び日本に来て、大宮に第二の愛仕幼稚園を設立した。中村が学んだのは、この第二の愛仕幼稚園の方であるらしい。

中村は幼時の遠い記憶をたどりながら、アプタン先生のことを次のよう

に記している。

長身、背すじがピンと伸び、容貌は典雅、気品のある方であった<sup>(注1)</sup>。

そして、中村は先生との印象に残る思い出を次のように記している。

(前略)、私は終了式のさい、終了の免状を頂けなかった。免状を頂くときは、アブタン先生の前に一人ずつ進み出て、お辞儀をし、免状を手渡して頂くのだが、そのお辞儀ができなかった。さあ、頭を下げて、と先生は何遍もくりかえし諭されたのだが、どうしても私はお辞儀ができなかった。それでは免状をあげませんよ、といわれても頭を下げられなかった。それではお母さんにお渡ししましょうね、と先生はいつて母に免状を渡してくださった。あれほど恥ずかしい思いをしたことはない、と後々まで母はいつていた<sup>(注2)</sup>。

極めて興味深いエピソードである。

それはそうと、この時の幼児中村はアブタン先生が詩心のある、詩人でもあったということを知る由もなかった。また、アブタン先生はこの目の前の「お辞儀をしない」変わった子どもが後に高名な詩人となることなど知る由もなかった。人生における実に不思議な邂逅の一場面である。

ところで、「長身、背すじがピンと伸び、容貌は典雅、気品のある」アブタンが、霜田史光らの前に姿を現していたのは、これ以前の1919年（大正8）である。

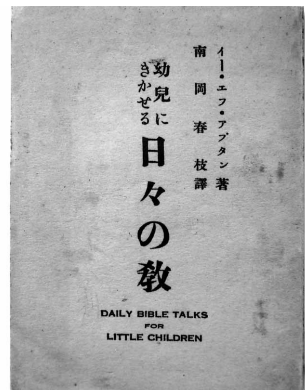
1919年（大正8）といえば、それはこの章の冒頭でも述べたとおり、史光らの雑誌『蒼空』にアブタンの詩が出ている時期であり、それはアブタンがアメリカから帰り、大宮に第二の愛仕幼稚園を設立してからである。アブタンが史光らと知り合っていなければ、彼女が『蒼空』に詩を寄稿することは起こり得ないからである。たぶん、霜田史光はそれ以前、すなわ

ちアプタンが浦和にいたころから知り合っていたのだろう。それにしても彼らがどのようにして知り合ったのか、詳しいことはわからない。

ただ、霜田史光の詩集『流れの秋』（文武堂書店 大正8年5月）には「野辺送り」と題する挿画があり、そこに描かれている二人のキリスト教尼僧が気になる。また、この詩集には、師の三木露風を介してのキリスト教の雰囲気、どこことなく漂っている<sup>(注3)</sup>。異国的な雰囲気も含め、霜田史光の周辺にはキリスト教の雰囲気や情調が漂っているのは、露風はもとより、アプタンが史光らの詩友であったことと関係があると判断する。

ここに、アプタンの著作『<sup>をしへ</sup>幼児にきかせる 日々の教』（\*写真①参照）がある。この本はイー・エフ・アプタン著、南岡春枝訳で教文館出版部から昭和2年（1927）7月4日、初版が発行された。B6判で全206ページである。英文タイトルは *Daily Bible Talks for Little Children* である。中身は、次のとおりである。

1. 世の創造      2. 主イエスの幼年時代      3. 主イエスの奇蹟
4. 主イエスの祈禱      5. 主イエスの友      6. 主イエスのお話
7. 主イエスの死      8. 主イエスの復活と昇天
9. 復習（\*以上の内容を復習するための問いかけ）
10. 十誡の第一誡
11. （同前）第二誡
12. （同前）第三誡
13. （同前）第四誡
14. （同前）第五誡
15. （同前）第六誡
16. （同前）第七誡
17. （同前）第八誡
18. （同前）第九誡
19. （同前）第十誡



写真①

- 20. 神を愛せよ      21. 隣人を愛せよ
- 22. 復習（＊10から21までの内容を復習するための問いかけ）
- 23. 主の祈禱      24. 使徒信経
- 25. 初代教会に於ける使徒達の行動      26. 外国伝道者

この目次からも察せられるように、この本はおとなが幼児に日々聞かせるためのキリスト宣教の書であり、聖書や使徒伝記をわかりやすく説いている。ただ、日本語としての訳は、必ずしも良いできればであるとは言い難い。

例えば、次のような日本語文である。

あなた方の知っている方のうちでキリストさまを知らない方がありますか。あなた方はキリストさまを大好きだといって誰かに笑われたことはおありですか。もし聖パウロやメリー・スレスサー（＊アメリカでのキリスト教伝道者。ダビデ・リビングストンと同様にアメリカで特に黒人の伝道に携わった。）がそんなにいて笑われたとしたら、二人ともキリスト教を愛することをよしてしまうでしょうか。そんなことはありませんね。あんなにいろいろの苦しい目に遭ったり危ない目にあっても、キリストさまを愛することをよさなかったのですもの、笑われたぐらい、何とも思いませんね。あなた方が大きくなって学校へいらっしゃると、あなた方のことを笑う人があるかもしれません。でも、キリストさまのあのお友だちがどんなに強かったか思い出するようにしたら笑われるくらい、何ともなくなりますよ。そうして、大きくなったらバプテスマ（＊洗礼）を受けてキリストさまのいい兵隊さんにおなりなさい<sup>(注4)</sup>。

さて、次に同人雑誌『蒼空』に所収のアプトンの詩作品をみてみよう。



Faith

A tile roof  
A scraggy pine  
A sunset glow  
That's all and yet I know  
People suffer  
All beauty fades  
The cold winds blow  
But, God's love holds the morrow.

この詩に「信仰」と題して訳を試みたのは霜田史光である。史光はこの詩の載った次の号で、次のような訳詩を発表している。

信仰

瓦屋根や  
うねり松や  
日没のくるめきや  
ただ それのみ—— されど又 われは知る  
美しきもの 皆の衰へや  
人々の悩みや  
冷たき風の<sup>すさ</sup>荒みやを  
しかも なお我知れり、神の愛こそは来るべき日にあることを。

（＊旧仮名遣いのまま。）

また、この訳詩を掲げた後に史光は前号の詩の第二行目「fine」が「pine」の誤植であったと詫びている。

竹 長 吉 正

ところで、わたくしはこの訳詩に不満である。この訳詩では、作者のこの詩に託した意図が正確には伝わらないと思うからである。よって、以下、わたくしの訳を掲げる。

誓い

瓦の屋根

やせこけた松の木

夕陽の輝き

それが私の前にあるすべてだ　されど私は次のことも知る

人々は苦しみ

あらゆる美しきものは色あせ

冷たい風が吹く

されど、神の愛は次の朝をつかんでいる

この詩は、前半（4行目の「……すべてだ」まで）が自分の目の前に広がる日本の自然の風景であり、後半（4行目の「されど……」以下）がそれに対峙する自分の内心から湧きあがってくる強い思いである。「神の愛は次の朝をつかんでいる」と思うのは作者自身の心に強い誓いの心があるからである。この誓いの心は、まさに信念であり、信仰の心そのものであるのだろう。

1行目「瓦の屋根」と5行目「人々は苦しみ」、2行目「やせこけた松の木」と6行目「あらゆる美しきものは色あせ」、3行目「夕陽の輝き」と7行目「冷たい風が吹く」はそれぞれ、関係を持ってつながっており、これらはすべて人間界、自然界の無常や、冷徹な現実の姿を示している。こうした人間界、自然界の無常や、冷徹な現実を作者は提示した上で、「されど」（それにしても）と言いながら、そんなに悲観することはない、なぜなら、「神の愛は次の朝をつかんでいる」のだからと読者を励ます。このような強い

考えや心が、どのようにして生れるのかといえ、それは一つには、キリスト教の信仰の心があるからだといえる。

アプタンが日本の風景や人々を見て、このような感慨を得たのである。彼女が詩の才能を持っていたかどうかは定かでないが、とにかく、詩などの芸術に深い関心があったことはこれで証明できる。

### (3) 日本工科学学校

明治末年から大正初めにかけての時期に中学校（＊但し、旧制中学校）卒で入学し、専門教育が受けられる工科学学校が東京にはいくつか存在した。霜田史光が入学した工科学学校は、いったい、どのような工科学学校だったのだろうか。

今井翠巖著『最新・増訂 男子東京遊学案内』（博文館 明治42年3月10日初版・明治43年11月4日増訂再版）という本を見つけた。その中にしている工業系の学校をリストアップすると、次のようになる。

私立 陸地測量練習所（設立 明治13年）

私立 東京物理学講習所（設立 明治14年）

官立 東京職工学校（設立 明治14年）

私立 工手学校（設立 明治20年）

私立 鉄道学校（設立 明治30年）

東京府立 職工学校（設立 明治32年）

東京府立 工芸学校（設立 明治40年）

私立 電機学校（設立 明治40年）

私立 東京工科学学校（設立 明治40年）

私立 日本工芸学校（設立 明治40年）

私立 日本工科学学校（設立 明治40年）

この他にも明治44年までに、中央工学校、早稲田工手学校（いずれも私立）などが設立された。これらの学校の中で、いったい、どれが史光の通った学校なのだろうか。

わたくしはこれらの中から創立年時や場所から見当をつけ、二つの学校に絞って詳しく調べた。明治40年12月に設立認可願いを出し翌41年4月に開校した東京工科学学校。同様に明治41年4月に開校した日本工科学学校。その時の東京工科学学校の住所は、東京市小石川区小日向水道橋2丁目63、64番地（現在、文京区小日向1丁目13番）。いっぽう、日本工科学学校の住所は、東京市神田区三崎町1丁目11番地（現在、JR水道橋駅の近く）。ちなみに、この日本工科学学校はのち、神田区の表猿楽町2番地（明治44年の住所。現在、JR御茶ノ水駅近く、神田駿河台に近い）、錦町3丁目10番地（大正8年の住所。現在の学士会館に近い）と移転している。

霜田史光が工科学学校に入学したのは、明治の末年、つまり、明治43年から明治45年のころであるから、日本工科学学校に入ったとしたら、神田区にある学校に通ったことになる。しかし、史光の兄霜田静志が書いている文章には、「弟は当時、本郷にあった」学校に入ったとある<sup>(注5)</sup>。すると、これは合わない。

わたくしは初め、これは霜田静志の記憶間違いと考えた<sup>(注6)</sup>。しかし、その後、いろいろと調べてみて、次のように考えるに至った。

史光が入学したのは、開校間もない東京工科学学校である。この学校は本郷に近い。春日、小石川、西片を越えると、本郷の東京大学に、確かに近い。だから、静志は弟の入った工科学学校は「本郷にあった」と記したのである。

ところで、『東工学園八十年史』（1988年）によると、明治44年（1911年）、東京工科学学校は神田に移転する。住所は東京市神田区錦町3丁目10番地（現在、千代田区神田錦町3丁目24番）。史光がこの移転先の東京工科学学校にまじめに通ったかどうか、それはわからない。

いずれにしろ、史光が東京工科学学校に通ったのは、明治43年4月から44年3月の1年間だったと判断する。もちろん、卒業したかどうかも疑わし

い。東京工科学校は現在、日本工業大学（埼玉県宮代町）となっている。日本工業大学の図書館その他に問い合わせたが、東京工科学校時代の在学生・卒業生に関する名簿や資料は無いとのことであった。

ところで、ふしぎなことに東京工科学校が明治44年に移転した住所が、大正8年の日本工科学校の住所と一致する。これは、どのように考えたらいいのだろうか。つまり、東京工科学校が日本工科学校と同じ位置にあるというのは、いったい、どのように考えたらいいのだろうか。

大正2年（1913）2月20日、神田書店街に大火災が発生し、約2100戸が焼失した。この後、東京工科学校は新築校舎を間もなく作るが、日本工科学校は当時、三崎町か神田駿河台にあったのだから、この大火災の影響を受けなかった。それならば、わざわざ、神田錦町3丁目まで引っ越す必要がなかったと考えられる。しかし、同じ東京にある私立の工科学校で、しかも、それほど遠くない所にあった学校なので、生徒募集で競合するから学校経営上、どちらかに吸収合併するという話が湧き起っても不自然ではなかっただろう。だが、東京工科学校がはっきりと、日本工科学校を吸収合併したという記録を未だ見ていない。

したがって、以下はあくまでも、わたくしの推測である。すなわち、大正8年頃は同じ敷地（神田錦町3丁目）内に東京工科学校と日本工科学校という二つの学校が存在したということである。そして、その後の歴史の歩みを確認すると、東京工科学校の名は残り、日本工科学校の名は消えている。一つ注目すべきことに、昭和6年（1931）、財団法人として東京工科学校が認可され、同時に「東京工業学校（甲種）」を併設するということがある。この「東京工業学校（甲種）」の母体となったのが日本工科学校ではなかろうか。わたくしは、以上のように考えている。

また、『学校法人 東工学園八十年史』（学校法人・東工学園 1988年）『日本工業大学百年史 歴史編』（日本工業大学 2007年）を参照しながら関係者に問合せを行い、この問題を継続して考えていく。

ともかく、残った学校、消えた学校のことを調査するのは至難のことで

ある。

#### (4) 史光の妻寿恵

霜田史光の妻<sup>すゑ</sup>寿恵（＊正しくは壽恵と書くが、以下、略体で寿恵と記す）について、いろいろと調べることができたので、以下、報告する。

拙著『評伝 霜田史光』（2003年9月）『霜田史光 —— 作品と研究 ——』（2003年11月）という二冊の本を出してから、実にたくさんの方からお手紙を頂いたが、その一人に岡田<sup>たえこ</sup>多重子さん（埼玉県蕨市在住）がいる。岡田さん（大正5年11月10日生まれ）は小学低学年時、霜田史光に会ったという。その時の思い出を手紙に記してくれた<sup>(注7)</sup>。その貴重な思い出のエピソードは後ほど、紹介するとして、岡田さんはその手紙の末尾で寿恵のことについての情報を手短かに記してくれた。以下、その部分を引用する。

因みに夫人の故寿恵子さんは旧姓星野寿恵子さんで、大正3年に男子師範附小を卒業され、県立浦和一女の20回の卒業で、浦和の方です。

この貴重な情報をもとに、わたくしの寿恵探しが始まった。岡田多重子さんの情報が正しいとすれば、星野寿恵は埼玉師範附属小学校の卒業で、埼玉県立浦和第一女子高等学校の前身である埼玉県立浦和高等女学校の卒業であるということになる。

岡田さんの紹介で、上田理子さんをご紹介していただいた。上田さんの旧姓は星野であり、しかも、その星野家は浦和宿の脇本陣をつとめた。その関係で蕨の旧家である岡田家ともつながりがあった。それで、もしかして、上田さんの実家である星野家が寿恵の実家のことを知っているのではと岡田さんは判断し、わたくしに上田理子さんを紹介してくれたのである。

上田さんによると、上田さんの実家である星野家とは関係が無いという

ことであった。そして、上田さんは郷土史家の中村徳吉氏の話として、「それは沼影という地区の星野家であり、当時、資産家であったが、後、没落した。その家の娘が寿恵であり、美人とのうわさがあった。」という話を伝えてくれた。

また、上田さんはご自身が浦和高等女学校の卒業であるので、卒業生名簿を調べてくださった。そして、20回の卒業生の欄に、「霜田（星野）寿恵」と出ていることを教えて下さった。

以上の情報をまとめると、寿恵の旧姓は星野であること、また、埼玉県立浦和高等女学校の第20回の卒業であることが、明らかになった。

こうして、わたくしは次に、浦和高等女学校関係の雑誌を調べ始めた。

浦和高等女学校には学友会と同窓会という二つの組織があった。学友会とは在校生で組織・運営する会であり、また、同窓会とは卒業生で組織・運営する会である。

初めは学友会と同窓会の併記で、『会誌』を発行していた。第七号（大正11年5月）までは、この形である。第八号（大正12年3月）から『会誌』は学友会単独の編集・発行となる。そして、同窓会は『同窓会誌』を編集・発行する。わたくしが見た『同窓会誌』の最も早いものは第九号（大正13年12月）である。これは、もちろん、卒業生だけの雑誌である。

このような雑誌の変遷で気づいたのは、次のことである。すなわち、当初は在校生と卒業生との協同で一つの雑誌を発行していたのだが、卒業生が増える、また、在校生の作品投稿が盛んになる、そのような事情から、互いに別の雑誌を持つようになったのである。

ところで、星野寿恵のことだが、彼女は大正5年（1916）4月に入学し、大正9年（1920）3月に卒業している。確かに第20回の卒業生であった。

また、星野寿恵の名を、いろんなところで見つけることができた。

第一に、『会誌』第六号（発行 大正9年12月25日＊写真②参照）に「浪の音」と題する短歌四首。作品は、次のとおりである。

竹 長 吉 正

浪の音なつかしみつゝ初秋の渚をふめば友のしのばる  
只一人今宵静に砂浜<sup>しづか</sup>によする潮の香なつかしみけり  
さびしきは秋の夕の水の音<sup>なみだ</sup>涙ぐましく胸にひびきて  
たそがれの鐘のひびけば松原に吸はれしごとく落ちゆく日かな

なお、この作品の後に「1919、10 —  
— 湘南にて」の注記が付いている。この  
注記から判断すると、大正8年（1919）10  
月、湘南海岸での作といえる。星野寿恵は  
この時、女学校の4年生で、まだ卒業して  
いない。しかし、卒業間近の4年生である。

また、この『会誌』第六号には「会員消  
息」の欄があり、そこには次のような文が  
載っている。



写真②

星野寿恵      相州大磯茶屋町 林方

つきのみや  
調の森に蟬時雨ふる七月 砂浜に松の生茂る大磯へ参りました。  
そして養生<sup>かたは</sup>側ら少しづつ、姉の手伝ひをいたして居ります。秋風吹き  
初めてはあれほど美しい色彩でかざられた浜もめっきり寂しくなり  
ました。浪の音する湘南の夕 遠く武蔵野を恋しがっては姉に笑は  
れました。そして母校の様子など記された友の便りのみをまって居  
ります。

詳しいことはわからないが、寿恵は姉に連れられて湘南に病氣療養に來  
たのではないだろうか。病名は、たぶん、肺結核の初期であろう。

ところで、この近況報告の文で冒頭に「調の森に蟬時雨ふる七月」と  
あるのに注目したい。なぜなら、<sup>つきのみや</sup>「調の森」とは浦和の調神社の森のこと  
であり、しかも、調神社の森と星野寿恵の実家（＊後掲、北足立郡六辻村



大字沼影）とはかなり離れているからである。

それから、いろいろと調べたところ、次のことがわかった。

浦和高等女学校の歴史を調べると、次のことがわかった<sup>(注8)</sup>。

浦和高等女学校は明治33年、埼玉県高等女学校という名で創立された。校舎は埼玉師範学校（＊男子のみ）の旧校舎を使った。それは現在の県立浦和図書館及び埼玉会館の場所にあった。そして、翌明治34年に、埼玉県女子師範学校が創立された。すると、埼玉県高等女学校は「浦和高等女学校」と名前を改めた。但し、埼玉県女子師範学校は浦和高等女学校と同じ校舎を使用した。当時は学生数が少なかったから、このようなことができたのであろう。そして、10年後の明治44年、浦和高等女学校は調神社の東に新校舎ができたので、埼玉県女子師範学校と分離して移った。

星野寿恵が学んだ浦和高等女学校は大正5年（1916）4月～大正9年（1920）3月であるから、調神社の東にできた新校舎であった。よって、つきのみや「調の森に蟬時雨ふる七月」という学校周辺の風景を懐かしむ文言が出てきたのである。

第二に、『同窓会誌』第九号（大正13年12月31日）の「名簿」欄に、星野寿恵の住所が載っている。それは、次のとおりである。

星野寿恵            北足立郡六辻村大字沼影二十二

これは星野寿恵の実家住所である。上田理子さんが中村徳吉さんから聞いた寿恵の住所「沼影」と一致する。

『同窓会誌』第十号（大正14年12月31日）の「名簿」欄に、星野寿恵の住所が載っている。それはやはり、前号と同じである。

第三に、『同窓会誌』第十二号（昭和3年3月25日）の「名簿」欄に、霜田寿恵（星野）として、次の住所が載っている。

霜田寿恵（星野）            東京市外雑司ヶ谷町亀原五九

竹 長 吉 正

星野寿恵は霜田史光（本名、平治）と結婚して、東京の雑司ヶ谷に住んだのである。

また、この『同窓会誌』第十二号には、霜田寿恵のかなり長い近況報告が「消息」欄に載っている。それは、次のとおりである。

海辺の三崎で一ヶ年余りを過ごし、よく学生時代に憧れて居た城ヶ島の燈台をお部屋で眺めながら、丁度あ<sup>ちやうど</sup>の頃とても流行した城ヶ島の雨、の小唄を口ずさみつつ、遠いかみ<sup>かみ</sup>（＊上。昔の意）の日の甘い記憶に浸って居りました。

春の海辺も和<sup>なご</sup>やかに美しく、渚に浜椿が真紅と燃えるように咲き、活動的な夏の海、また冬の岩陰の温かさ、ああ、それよりも秋の海のすばらしさよ。よく夕暮れ時となると主人と二人で海辺の丘に立っては火の玉のようになって落ちていく夕日を眺めたものでした。……はるばるとした海、それを眺めていると、しみじみ自然の偉大さに魅せられて人の世の小さなことなどいつの間にか跡形もなく忘れられるのでした。

海辺での生活も本当に趣味そのもののようでした。でも潮の香りにも飽き、都がまた恋しくなって、昨年十二月ここへ引き上げて参りました。

自分の趣味から少しの間、劇界へも顔を出しましたが、只今はすっかり去って、家庭に静かな和やかな日を送って居ります。二人だけでは広すぎる洋館ですけど、主人が原稿生活をしているものですから、毎日のように詩人をはじめ、文士、画家、音楽家などでいつも客間をにぎわして居りますし、相変らず、足りはしませんが（＊「金銭的に充分でない」の意）、私もいつも健やかでお仲間入りをしています。

けれど、何という早さでしょう！ いつの間にか姪が母校の三年になる立派な女学生振りですもの。実家へ参る度にしみじみ学生時

代がなつかしまれ、母校のご様子など、伺われますのを楽しみとしております。それと元の岩本さん医王夫人や塩野さん（＊級友の岩本あい子。旧姓岩本あい子は卒業後、結婚して医王姓となり函館に住む。また、塩野は塩野千代子）のお便りなどで昔の気分に戻って居ります。

末筆になって大変すみませんが、諸先生初め皆さまにご無沙汰のお詫びを申し上げます。重ねて先生方のご幸福と皆さまの幸福をお祈りしつつ。

（＊旧漢字・旧仮名遣いを現代表記に改めた。）

これはたいへん興味深い消息文である。この消息文から次の三つのことが明らかになる。

その一は、「海辺の三崎で一ヶ年余りを過ごし」とあり、この時の住所（東京市外雑司ヶ谷町亀原五九）以前に史光・寿恵は三崎（現在、神奈川県三浦市三崎）で一ヶ年余りを過ごしていたことが明らかになる。これは大正末年から昭和初めのことである。史光も肺を病んでいた。

ところで当時、『文芸時報』という文芸新聞<sup>（注9）</sup>があり、この新聞の文壇情報によると、大正15年8月に霜田史光が「三崎町上橋の荒井邸内に転居」という記事がある。この記事をもとに推測すると、史光と寿恵は大正15年8月に三崎町へやって来たということになる。

そして、既に見たように（『会誌』第六号の「会員消息」欄参照）、寿恵も肺を病んでいた。二人とも完治していないが、この時（大正15年）は史光の症状が重く、史光の療養が主であったと判断する。

その二は、「昨年の十二月ここへ引き上げて参りました」とあるから、昭和2年の12月、三崎から東京の雑司ヶ谷に移住したことがわかる。大正15年8月に三崎町へやって来て昭和2年12月に上京したのだから、三崎町の滞在期間は一年と四ヶ月ほど、それを寿恵は「海辺の三崎で一ヶ年余りを過ごし」と記したのである。

史光と寿恵が上京したのは、史光の健康がやや回復したこともあるが、

竹 長 吉 正

昭和3年2月に日本民謡協会の設立があつて、その準備のためでもあつた。この年の秋10月、日比谷の野外音楽堂で「民謡祭」が行われ、史光は事務局の仕事を引き受け、大いに活動した。

その三は、「自分の趣味から少しの間、劇界へも顔を出しました」とあり、寿恵は劇の舞台にも立った。劇とは当時盛んになりつつあつた新劇のことであるが、寿恵がどのような劇団に所属し、どのような劇に出たのかは不明である。美人であつたそうだから、他からも勧められたのであろう。ちなみに、史光は戯曲も書いているから、その方面からの誘いもあつたのだろう。

さて続けて、その後の『同窓会誌』を見てみよう。

『同窓会誌』第十七号（昭和7年12月19日）の「名簿」欄に、次のように出ている。

霜田寿恵          東京市豊島区巢鴨町庚申塚217 長沢方

これは史光と住んだ晩年の住所である。この翌年（昭和8年）3月11日、史光は永眠する。

また、『同窓会誌』第二十一号（昭和11年12月25日）の「名簿」欄である。ここには、霜田寿恵の名前は載っている。但し、「昭和8年4月4日、死去」とある。

ところで、浦和高等女学校の『会誌』『同窓会誌』を見ているうちに、石井桃子（児童文学者）のことに注目した。ここで、しばらく協道に入つて、浦和高等女学校時代の石井桃子のことにについて記しておく（\*具体的には後の第6章で記す）。なぜ、石井のことにふれるかということ、星野寿恵の生年を調べる手がかりとなつたからである。

石井は浦和高等女学校に大正8年4月に入学し、大正12年3月に卒業した。第23回の卒業生である。星野寿恵と3年の差がある。石井は明治39年（1906）の生れだから、この計算でいくと、星野寿恵は明治36年（1903）

の生れということになる。霜田史光は明治29年（1896）の生れだから、寿恵は史光より七つ年下である。先に見たように、霜田寿恵は昭和8年4月4日、永眠した。夫史光が亡くなった翌月である。弱冠30歳の若さであった。死因は、やはり、肺結核からくる呼吸困難であっただろう。史光から結核菌をもらったというよりも、既に見たように、浦和高等女学校在学中から、その兆候があったのだから、夫婦同病であったと見るのが妥当である。

## （5）史光の少女小説「詩人の妹」

霜田史光の小説に「詩人の妹」（『少女画報』大正10年12月）がある。

この小説は、寿恵のような文学少女を扱っている。よって、ここに紹介する。この時代には、このような文学ファンの少女が、日本全国いたるところにいたのではないだろうか。

寿恵が史光と結婚するのは、いってみれば、このような文学ファンの少女が「あこがれの詩人」と結婚したというようなものである。芸能人（歌手や俳優）にあこがれて、一ファンが、その歌手や俳優と結婚するように、この時代は「やや教養のある女学生」が文学者（作家や詩人）にあこがれて、その人との結婚を夢見たのである。親を始めとして周りの人は大反対したであろうが、少女の純粹さが、ひたむきに「恋愛の感情」を募らせていったのである。このような背景的事情を念頭に置いてこの作品を読むと、また、一種の味わいがある。

詩人の妹

霜田史光

「あなたのお兄さんは詩人ね。まあ、いいわねえ。」

「森さんは何という幸せな方でしょう。わたし、うらやましいわ。」

「ほんとだわ。感情が豊かで、理解があって、美しい詩を書いて、いろんな人に崇拜されるし……」

ある女学校の校庭で、森ふみ子はお友だちから、その兄の年雄<sup>としお</sup>が詩人であることを知られた時、みんなからこうした言葉の雨を受け取ったのでした。

ふみ子はさすがにどこやら嬉しい気持ちを隠すことができませんでした。何となく自分までが祝福されているような、幾らか誇らしい気分も加わって来るのでした。しかし、今まで自分たち兄妹<sup>きょうだい</sup>がどんなにして暮らしてきたかということを考え出したら、喜びも誇りも一つの厳しい心に変わってゆくのでした。ふみ子は過ぎし日の不幸だった自分たちの生活を考えました。

「森さん、わたし、あなたの兄さんの詩が大変好きですわ。ね、森さん、お兄さんはどんなふうにして、あんなに有名になられたの？ 差支えがなかったら、話してちょうだい。」

ふみ子の顔色に、さっと暗い影が差しました。それは明らかに、そのようなことを話すのは嫌だという意味に見えたので、

「ええ、それがいいわ。わたしからもお願いするわ。」

「わたしもお願いするわ。」

「わたしも。」

こうたくさんのお友だちから強いられては、ふみ子は話したもののか話さぬものかと迷わずにはいられないのでした。しばらく黙って、ためらっていたふみ子はふと、兄がいつか、「文学者には秘密はない」といった言葉を思い出しましたので、ようやく決心したように顔をあげ、  
「それではお話ししましょう。それをお聞きになれば、きっとびっくりなさるわ。幸福とか、憧れとかいう美しいものではなかったのですわ。それこそ、死ぬか生きるかの境目でした。」

そう言ったふみ子の顔には、きりりとした聡明らしいうちにも、どこやら苦労したような感じがするのです。

ふみ子は話し始めました。

わたしたち兄妹は、幼時を中国の小さな町で送りました。

今でもそうですが、以前、私の家は、それはそれはひどい貧乏に苦しめられました。もっともずっと前は、そう貧乏でもなかったのですが、父が亡くなってから急にその日暮らしも差支えるほどになったのです。兄さんはその頃小学校から中学校へ移ろうとしていた時でしたから、叔母などは止めた方がいいと言ったにかかわらず、母は自分の身を削っても男の子には教育してやらなければならないといって、少しばかりの貯金をあてにして兄を中学校へあげたのです。その頃私はまだ、小学校へあがったばかりでした。わたしたち兄妹は、母の心も察してできるだけの儉約をいたしました。それにもかかわらず、わたしが尋常四年になった春、兄は中学を三年で退かなければならなくなりました。それはもう、母の貯金が無くなったからでした。その時、母は兄に向かって、

「年雄、おまえにはほんとうにすまないと思うが、今年きりで学校をやめておくれ。母さんもおまえを<sup>かあ</sup>をどうかして一人前の人間として一本立ちができるように教育したいと思っていたのですが、おまえも知ってのとおり、わたしたちはこんなに貧乏だし、それに、わずかばかりの貯金もう無くなってきました。この先とても、母さんの腕一つでは卒業させることはできません。」

と言って母は、ぼろぼろと涙を流しました。

兄はうなだれて、悲しそうに聞いていましたが、  
「もっともです。母さんにそんな苦勞をかけてすみません。ほく、これからは学校をやめて働いて、母さんの手助けをしましょう。」  
「ああ、そうしておくれ。」

母はこう言いましたが、じっさい、兄の働きを待たなければならないほど、貧乏が差し迫って来ていたのです。

間もなく兄は、ある会社の事務員の見習いになって、毎日通うようになりました。今まで晴れ晴れとしていた兄の顔は、その頃から急に暗くなって、話をするのさえ、物憂いような様子をいつも示していました。

兄はその頃から、詩を作り出したのです。もっとも、小学校時代から、

竹 長 吉 正

そういうものは好んで読んだり作ってもみていたようですが、本当に真剣になって作り始めたのは会社勤めをするようになってからでした。

兄は時々、こう言いました。

「すべての楽しみがほくから奪い去られても、詩だけは最後まで味方だ。」

そう言って、きつい決心の色を、きりりとした眉の間に見せるのでした。

ここに一つ、困ったことができました。

というのは、兄は詩を作る仲間の青年たちと一緒に—— といっても兄が主宰で、詩の同人雑誌を始めたのです。もちろん、薄い、定価の安いものでしたが、毎月毎月、少なからぬ損を背負わなければならなかったのです。それは仲間のうちで出し合うことになっていましたが、兄は自分が主宰している関係上、一番多く出さなければなりませんでした。その結果、会社からもらうお金の幾分かは、毎月、その方に使ってしまうことになりました。

こうしたことによって、兄の名は、幾らかずつ世間に知られてきましたし、その上、兄はその頃、詩壇の大家であるM先生について熱心に詩を研究していましたので、だんだんと兄の詩も世間で認められるくらい、いいものになりました。

ところが、前に言ったとおり会社からもらうお金の半分も、その方に使ってしまうので、兄の月給をあてにしている母や私の生活は、まるっきり、運転の止まった車ようになってしまいました。

ある日、母は兄を呼んで、

「年雄、おまえが好きな文学をやるのもいいけれど、いったい、おまえは母さんや妹をどうするつもりだね。おまえにそう、金を使われては、どうにも暮らしてゆくこともできないじゃないか。」

と言って、涙もろい母は、すぐにボロボロと涙を流しました。

それを見て、感情的な兄は、

「母さん、かんにんしてください。ほくが悪うございました。もう、雑誌などはやめます。そして、一生懸命、勉強いたします。」



と言いました。そして、兄は悲しい心で雑誌を廃刊しましたが、それから、いっそう兄の顔が曇って、少しのことにもじきにかんしゃくを起こし、母さんやわたしを困らせました。

ある時、兄は髪の毛をかきむしって、  
「ぼくは会社の事務員で終るために、生れてきたのだろうか。」  
と言って、男泣きに泣いていました。

わたしは気の毒になって、  
「いいえ、兄さん、そんなことはありませんわ。事務員をしていたって、何をしていたって、偉い人は偉くなりますよ。ね、この間、兄さんが話してくれたでしょう。ロシアのゴーリキーって人ね。わたし、兄さんも今にゴーリキーみたいに偉くなると思うわ。」  
と慰めるつもりで、少し言い過ぎたくらいに言ってみました。

すると兄は、たいへん感動して、  
「ふみ子！ おまえはよく言ってくれた。そうだ、ぼくはこれから、どんな苦勞をしても、やってみる。ぼくのほうが、いよいよいけないとなれば仕方がないが、まだぼくは、詩人として世の中に立てないと思うほど、落胆していない。」  
と言って、すっかり気を取り直したようなので、わたしも涙がこぼれそうになるほど、うれしい思いがいたしました。

このことがあってから、一週間ばかり後のことです。

兄は一通の書置きを残して、出奔しゅっぽんしました。その書置きは母さんとわたしとに宛てたもので、わたしのものには、  
「自分はこれから上京して、あらゆる苦しみと闘って、必ず、詩の道で立つてみせる。東京は自分の天分を試す、よい所だ。母さんやおまえを置いて行く勝手を許してくれ。今、ぼくは焼かれるような芸術欲に燃えている。後のことは、おまえに頼む。生活の安定を得たら、すぐに呼ぶ。」  
というようなことが、細々こまごまと書いてありました。

母さんの方へは、もっとと長々といろんなことが書いてあったようでした。

母さんはそれを見終わって、  
「ああ、たった一人の息子に捨てられた！」

と言って、子どものように、わっと泣き出しました。

わたしも一緒に泣きました。そして、母さんと二人で、目的のためとは言いながら、どんなに兄のことを憎んだり恨んだりしたことでしょう。

仕方がないので、それからはわたしが、兄の勤めていた会社の給仕として出るようになりました。母はお琴の師匠を始めまして、二人で細々と暮らすことになりました。

東京へ行った兄からは、時々、手紙が来ました。母もだんだんと兄の心がわかってきて、ついには、こちらは心配はないから、おまえはしっかりやってくれというような手紙をやるようになりました。

そうして三年経ちました。兄の名は、いろいろな新聞や雑誌で見えるようになりました。遠く離れていて兄の作品に接するわたしは、兄の心持や、その天分がだんだんわかってきて、日に日になつかしさが増してきました。

不幸であった私たち親子にも、救いの神のお声でもかかったかと思うほど、思いもよらぬ幸せが湧いてきました。勸業債券の一千円当選！

父が亡くなる前に買っておいたのが四、五枚残っていたのですが、ある日、新聞に出ていた番号と合わせてみると、まさしく当選していたのです。

このことを兄に知らせると、兄はひじょうに喜んだ手紙をよこして、こちらにもこうした喜びがあるといって、詩集出版のことを知らせてきました。それは、ある大きな書肆が兄の詩を気に入って詩集にしたいといってきたのだそうです。そうして、その方から相当なお金も入るので、この際、みんなで東京に移り住むようになってはということでした。

母はそれを見ると、日ごろから離れて住んでいることを嘆いていたので、すぐ賛成して、間もなく私たちは東京に住むようになりました。

東京に来てからは、郊外に小さな家を借りて、母子三人で楽しく住みました。兄の詩集は思いがけずよく売れて、その方から入るお金や、他の新聞や雑誌から入るお金で、儉約していれば三人の暮らしは、例の一千円に

手をつけずとも、差支えがありませんでした。

兄は、

「ふみ子、おまえにも、とんだ苦勞をかけてすまなかった。少し遅れたけれど、これからでも女学校へ入る気があるか？ あれば、お礼としてあげてやる。」

と申しました。

「ええ、どうぞあげてください。」

わたしはその時、どんなに喜び、そして、ありがたく思ったのでしょうか。そうして、わたしはこの女学校へ来るようになったのです。

ふみ子は、熱心に聞いていた友だちの顔を見て、言葉を切りました。

友だちはみな、感動した目を見張っていました。

「それこそ、本当に尊い経験ですわ。」

と一人が言うと、みな一緒に、尊い経験だといって、詩人の兄さんとふみ子をほめました。

「それにしても、お兄さんは三年間、東京で何をなすっていらっしゃったんです？」

と他の一人が言うと、ふみ子は、

「あとで聞いてみたら、職工になったり、<sup>にんぶ</sup>人夫になったり、新聞配達になったりして、それはそれは苦勞したそうです。」

と答えました。

「まあ、どうりで、詩の中にいろんな生活が出てくると思った。」

と言ってみんなは、つくづくと感動しました。

（＊旧漢字・旧仮名遣いを現代表記に改めた。）

それほど感動的な作品とは言い難いが、霜田史光が書いた作品という観点から見ると、幾つかのことが指摘できる。

第一に、発表誌の読者を意識して、このような作品を書いたのであろうが、詠嘆的・抒情的な書き方になっている。

第二に、史光自身の夢が、わずかながら投入されている。すなわち、詩人として成功する夢である。しかし、当時の文壇において、詩人もしくは小説家として、このような成功をおさめる人は、極めて少なかった。もっといえば、文学で金銭的に自立できるなど、夢のまた夢、というのが現実であった。しかし、この作品がこのような形で書かれたということは、当時の女子学生にとって、詩人や小説家という、いわゆる「文学者」は、憧れの君（スター）であったということである。このような時代の姿を、この作品は、よく描いている。そういう点で、価値はあると判断することができる。

しかし、文学作品としての価値は、それほど高くはない。星野寿恵も、おそらく、この作品に登場するような文学少女であり、文学者に憧れて史光と出会ったのではないだろうか。したがって、わたくしはこの作品「詩人の妹」を読むたびに、星野寿恵のことを思い浮かべる。そして、当時、この星野寿恵のような文学少女が、全国にたくさんいたことが推測できる。だから、史光は『少女画報』という少女向けの雑誌に、このような作品を書いたのである。

この作品は、一文学少女が文学青年（もしくは、中堅の文学者）と恋愛するという筋ではない（\*そうならば田山花袋の『蒲団』と似るが、この作品はそうならない）。文学者の身内にいる「ふみ子」が女学校の級友からうらやましがられるという筋になっている。そして、文学ファンがふみ子を通して、文学者（詩人・森年雄）のあれこれ（苦労話などの情報）を聞き出すという展開になっている。

いずれにしても、文学者（詩人や小説家）が当時の若者を惹きつける要素を多くもっていたということである。こうした若い読者の存在があって、このような作品が書かれたということである。

## （6）一少女の眼に映った史光

前章(5)では、史光の描いた文学少女を彼の短篇「詩人の妹」で見たが、ここでは幼い一少女が壮年期の霜田史光をどのように見ていたかを探る。文献として、前章(4)で取り上げた岡田多重子さんの手記<sup>(注10)</sup>がある。以下、それを引用する。

もう今ではご本人にお会いしたことのある方はおそらくご在世ではないと思ひまして、幼い日に（80年前、小学一年生ごろ）霜田青年にお会いした日のことをお話し申し上げたくなりました。

それは大正12年か13年かの春、今頃のことでした。霜田さんが美谷本村<sup>み やもと</sup>のご実家から東京へお帰りの途中、蕨の友人の方と我が家に見えました。我が家とは、どのようなお知り合いなのかは私は存じませんが、ちょうど、いつもは外で遊んでいる私<sup>あぜみち</sup>が家に居り、とてもおやさしいお兄さんのように感じ、ずーと大人たちの中に居座っていました。やがて夕方近くなり、暖かくお天気も良いので、母も共々、駅までお送りすることになり、私もついて行きました。裏通り（今の市役所通り）を、その頃は田んぼと麦畑だけの間の曲がり曲がった畦道、駅まで1キロ。列車は上野行きが一時間半おきぐらい、のんびりと大人たちはいろいろお話ししながら……。私は退屈し、レンゲ草を摘みながら、覚えたばかりの童謡を歌っておりましたら、霜田さんが突然振り返られて、「とてもいい唄だね。もう一度聞かせて！」とおっしゃったので、私は得意になって、声を張り上げて歌いましたら、手帳をお出しになって、書きとめておいででした。

作詞、作曲とも、どなたかわかりません。霜田さんも御存じでなかったようです。それは「山椒<sup>さんしょう</sup>の木」という童謡で、

田圃<sup>たんぼ</sup>の 田圃の

竹 長 吉 正

山椒の木

かずさ いわし  
上総は 鰯の

大漁だ

おいらが とう 父さん

いつ帰る

聞かせて くれぬか

山椒の木

後年、母からその日のことを聞きましたが、田圃の中の一本の山椒の木から、いきなり上総に飛び、漁に出たまま、なかなか戻らぬ父を案じる少年の気持ち、その詩の着想がなかなか良いとおっしゃっておいでだったとか。

ただ、それだけの幼い日のなつかしい思い出ですが、霜田さんは本当に、心細やかな、おやさしい方でした。

(2006年4月21日、竹長宛書簡)

岡田多重子さんは、大正5年(1916)11月10日生まれであるから、大正12年13年の春というと、小学2年か3年(7歳、8歳)である。史光はこの時、28歳。

岡田さんが史光の前で歌った童謡「山椒の木」は、野口雨情の作品。野口の童謡集『十五夜お月さん』(大正10年6月)に収められている。

当時、史光がこの作品を知らなかったということは、ほとんど考えられない。

岡田さんによれば、史光がそれをメモしたということだが、それは歌詞をメモしたというのではないだろう。少女の歌い方を聞いて、何か感じる

ことがあり、それをメモしたのではなかろうか。なぜなら、史光は、これ以前の大正9年（1920）11月、東京丸の内、本居みどりの歌う「十五夜お月さん」（歌詞・野口雨情）を聞いている。また、雑誌『金の船』編集部などで野口雨情とよく会っている。したがって、野口のこの作品「山椒の木」も、よく知っていたと考えることができる。

友人野口雨情の作品が、自分の郷里の一少女の口で歌われているということ、それ自体に感動したのである。時代は、目で見て味わう詩の時代から、耳で聞いて味わう詩の時代に移りつつあった。史光や雨情が活躍する童謡や新民謡の時代が、もうそこまで来ていたのである。さらに、レコードが普及すると、「詩と音楽」の関係は、ますます緊密になる。しかし、その一方で、音楽に食われないようにと「詩の独立」「詩の自立」を叫ぶ運動も起って来る。

霜田史光は、このような狭間はざまの、実に微妙な時代に生きた。すなわち、まさに過渡期の詩人であった。

## （7）石井桃子と校友会雑誌

この章では、石井桃子が関係した浦和高等女学校の校友会雑誌について述べる。

既に前章(4)で述べたように、浦和高等女学校には学友会と同窓会という二つの組織があった。学友会とは在校生で組織・運営する会であり、また、同窓会とは卒業生で組織・運営する会である。

初めは学友会と同窓会の併記で、『会誌』を発行していた。第七号（大正11年5月）までは、この形である。第八号（大正12年3月）から『会誌』は学友会単独の編集・発行となる。そして、同窓会は『同窓会誌』を編集・発行する。わたくしが見た『同窓会誌』の最も早いものは第九号（大正13年12月）である。これは、もちろん、卒業生だけの雑誌である。

これらの『会誌』『同窓会誌』の中で石井桃子の名前が初めて登場する

のは『会誌』第六号（大正9年12月）からだ、実質的に執筆などが見られるのは『会誌』第七号（大正11年5月）からである。この号に石井は、「日光方面修学旅行記」を執筆している。

また、『会誌』第八号（大正12年3月）には、次のような記事がある。

#### 関西修学旅行記（その三）

中山、石井（＊この旅行記は数回に分けてのリレー式分担執筆であり、中山と石井が第三回を担当した。）

#### 富士登山記

石井（＊これは石井の単独執筆。なお、この記事の後に、「富士登山旅程と参加者」の記事が掲載されている。）

#### 学友会役員一覧

（＊この記事の中に、「図書部 石井桃（四乙）」とある。四乙とは四年乙組の意。）

#### 学芸会の次第

（＊これは学芸会プログラムの再掲であり、その14番目に「英詩暗誦 矢と歌 四乙 石井」とある。

#### 訳詩「天の手術」「水仙」

中村道（＊英語科の先生）

これらのことから、浦和高等女学校時代の石井桃子の姿が推測できる。

石井は他の級友たちと活発に行動していたということが、よくわかる。「修学旅行」と題して日光と関西という二回の記事を書いているが、三年生の時（大正10年）日光に行き、四年生の時（大正11年）関西に行ったのである。これが当時の浦和高等女学校修学旅行の通例だったのである。

また、旅行といえば、修学旅行のみならず、富士登山も行っていた。当時は、男子のみならず女子も身体を強健にするという趣旨から、こうした登山などが行われたのである。



さらに、学友会での活動を見てみると、石井は図書部に所属している。本好き、読書好きだったことがわかると同時に、これは自他ともに認めていたことだったのであろう。

また、学芸会では英詩の暗誦を行った。これは後に、日本女子大学の英文科に進むことを裏付けるものである。やはり、学科では英語が好きであり、得意であったのだ。

そして、この雑誌『会誌』第八号には、石井らの英語の先生であった中村道<sup>みち</sup><sup>(注11)</sup>が訳詩を寄稿している。「天の手術」はスチブンソン（ロバート・ルイス・ステューヴンソン）の、「水仙」はウォーズワルス（ウィリアム・ワーズワス）の作品である。

谷の上に 岡の上に  
高く漂ふ 雲のごとく  
われ唯一人 さまよひぬ  
折しも 忽<sup>こつじょ</sup>如 我は見ぬ  
一団の 一軍勢の  
金色なる水仙を  
湖のほとり 木々の下  
そよ吹く風にゆらぎつつ  
をどりつつ ありけるを

たとへば天の川に  
まばたき きらめく星のごとく  
はてしなきの線となりて  
入江の岸につらなりぬ  
一万ともおほしきを  
我は一<sup>いちばう</sup>瞬に収めたり  
快活なる舞踏に

そが頭を打振り居りしよ

かたへなる小波もさざなみ舞踏しぬ

されど、そがよろこびには

きらめく波も 及ばざりき

かかる たのしきとも伴侶を得て

詩人、只、華はなやぐのみ

我はみつめぬ——みつめぬ——されど

かかるみもの観物の

如何なる宝もたらを齎すべきや

つゆ 知らざりき

何となれば 我しばしばむな虚しく

はた 瞑想に うち耽ふけりて

わが寝椅子に横たはり居る時

うち裡なる眼に

ひらめ閃き来る きたかのみもの観物

これよ 独居の天福なれ

かくて我 ころろ 喜びに満たされ

水仙と共にをどる

(＊旧漢字は新漢字に改めた。仮名遣いは旧のまま。)

これは、ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth) 「水仙」 (The Daffodils) の訳である。大意は次のとおりである。

### [第1連]

谷や岡の上の、空に浮かぶ雲のように、私は一人さまよっていた。

すると突然、金色の水仙の群れに、いや、大群に出会った。

それは湖のそば、木々の下に、そよ風には吹かれながら、小躍りしている。

[第2連]

天の川の上にきらめく星屑のように、ずっと続いて、

入江のふちに沿って、果てしなく、水仙は伸び広がっている。

一目見ただけで一万ほどもあり、それらは頭をあげ、ダンスを踊っている。

[第3連]

花のそばに向かって小波も踊った。だが、花の方が、きらめく小波にも勝っていた。

このような愉快的な花の群れに交じって、詩人である私はどうして快活にならずにいられようか。

私は見つめた、じっと見つめた—— だが、その眺めが私にとてつもない宝をもたらしたことに気づかなかった。

[第4連]

私が虚しい思いの時、また、寂しくて長椅子に横たわっている時、

花はとつぜん、心の眼（それは孤独を祝福するものでもあるのだが）に閃き映って、私の寂しさを慰め、喜びに変える。

その時、私の心は喜びに満ちあふれ、水仙と共に踊ってしまう。

この詩の訳の難しさは、最終連（第4連）の第4行目が、どこにつながるかの解釈にある。第4連（英語文）を次に示す。

For oft, when on my couch I lie  
In vacant or in pensive mood,  
They flash upon that inward eye

Which is the bliss of solitude ;  
And then my heart with pleasure fills  
And dances with the daffodils.

第4行目Which is the bliss of solitude ; (「孤独の祝福であるところの」)は通常、その前の、inward eye (「内なる眼」、心の眼)の説明と考えられるから、「孤独の祝福であるところの 内なる眼」とつながっていくと解釈する<sup>(注12)</sup>。しかし、中村道は、They flash upon that inward eye (裡<sup>うち</sup>なる眼に閃き来る かの観物<sup>ひらめきた みもの</sup>)として、They (つまり、水仙の情景)が「独居の天福なれ」(孤独を祝福するものだ)と解釈するのである。中村の解釈を採ると、詩人が瞑想にふけり、長椅子に横たわっていて、心の眼に水仙の情景が浮かぶ時、この時こそ、まさに、孤独であることを祝福するものとなる。これは、何となく理解できる解釈である。

しかし、いっぽう、「孤独の祝福であるところの 内なる眼」という解釈は、どうだろうか。これは、「内なる眼」を説明するだけの言葉となっており、詩の表現としては稚拙である。

よって、わたくしは中村道のように、この部分を解釈する。

先に示した大意は、通常のものに沿ったものだが、この部分を次のように改めると次のようになる。

私が虚しい思いの時、また、寂しくて長椅子に横たわっている時、  
心の眼に閃き映ってくる、あの水仙の情景、それは私の孤独を祝福するものだ。(つまり、それは私の寂しさを慰め、喜びに変える。)

そして、私の心は喜びに満ちあふれ、水仙と共に踊ってしまう。

英詩の翻訳は、なかなか難しいものだが、それにしても、このような英語に堪能な師中村道に教わって石井は英語が好きになり、大学の英文科に進むようになったのである。

石井桃子は大正8年4月、浦和高等女学校に入学し、大正12年3月、卒業した。第23回の卒業生である。そして同年4月、日本女子大学英文科に入学した。

『会誌』に關しての記述は以上のとおりだが、『同窓会誌』に關しての石井の記述は多くない。

『同窓会誌』第九号（大正13年7月）「消息」欄に石井の記事が出ている。それは次のとおりである。

卒業してからもう一年半、私達の後に一回の卒業生が出て私達も古くなったわけです。震災後の一年は殊に早かったように思われます。種々なことが起きたからでしょう。その間に、私も再びつつかしい学生生活に舞い戻りました。これが何より一番うれしいことです。無自覚に過ぎた女学校の生活も、それが過ぎてしまった後になっては、どんな懐かしいものなのでしょう。けれど文通するお友達もどんどん減り、ほんの一、二人となった今は、淋しくなります。必ず今の私の生活が過ぎた後になっては、一生を通じての最も楽しい思い出になることを信じて、心からの楽しい生活を心がけています。会誌で皆様とお会い致しましょう。（＊新漢字、新仮名遣いに改めた。）

文中に「震災後の一年」とあるように、石井が浦和高等女学校を卒業し日本女子大学に入学した大正12年（1923）の9月1日、関東大震災が起った。震災時のことは詳しく記されていないが、石井の入学した日本女子大学でも大変であつたろうし、また、浦和高等女学校でも大変であつたろう。

既に述べたように、浦和高等女学校の『会誌』『同窓会誌』を見ると、『会誌』第七号（大正11年5月）と第八号（大正12年3月）はつつがなく発行されているが、『同窓会誌』はその第九号が大正13年12月に発行されている。

順調にいけば、『会誌』『同窓会誌』は大正12年度（大正12年4月～13年

3月)に一回程度発行されていいはずであるが、わたくしの調べた限りでは、該当する雑誌を見つけることができなかった。『会誌』の方はともかくとして、『同窓会誌』第九号(大正13年12月)は震災後の最も早い発行ではなかったかと判断する。

ところで、前掲の消息文は女学校を卒業した石井の心境を率直に綴っている。また、「再びなつかしい学生生活に舞い戻りました」とあるのは、震災後の混乱で大学が休学になっていたのが復旧して、大学生活を再び続けることになったことを告げているのである。

また、同誌同号の名簿欄には、「浦和町三三八」という石井の住所が出ている。石井は日本女子大学へ浦和の自宅から通っていたのである。

このように見てくると、わずか三年の差でありながら、霜田寿恵と石井桃子との差が感じられる。寿恵はどちらかと言うと日本的であり、しかも、お嬢さんでありながらも田舎の大農家の娘として封建的な家族(家庭)の中で暮らしていた。大正ロマンの空気に魅かれながら、史光と同じように新劇や民謡詩・短歌などの文化に影響を受けているが、その精神は日本的である。それに対して、三年若い石井は、体が頑健であったこともあるが、当時の中学生(男子)と同じように登山や旅行をし、片や学内においては英語を駆使して発表を行うなど、西欧的な学校生活を送っている。詳しく述べるには石井の著『幼<sup>おさな</sup>ものがたり』等を参照しなければならないが、石井の浦和高等女学校での生活は、ともかくハイカラであり、日本的、及び感傷的な印象を与えない。片や、霜田寿恵のイメージは竹久夢二の美人画を想起させる。だとすれば、石井のイメージは理知的なインテリ女性のイメージであり、まさに師の中村道に沿った西欧的な生き方である。大正10年前後には、高等女学校に学ぶ女子学生には、このような二種類のタイプがあったと判断できるのである。

## 注

- (1) 中村稔『私の昭和史』（青土社 2004年6月）24ページ。
- (2) 前出(1)『私の昭和史』26ページ。
- (3) 三木露風は大正二年頃からキリスト教と関わりがあり、史光が露風の『未来』同人となった大正四年に露風は北海道のトラピスト修道院を訪ねたりしている。
- (4) イー・エフ・アプタン著、南岡春枝訳『幼児にきかせる 日々の教<sup>をしへ</sup>』（教文館出版部 1927年7月）202ページ。
- (5) 霜田静志「ある詩人の生涯に顧みて——詩の精神分析」（『児童心理』1965年7月号）
- (6) 拙著『評伝 霜田史光』（日本図書センター 2003年9月）15ページ。
- (7) 2006年4月21日付（消印4月25日）竹長宛書簡。
- (8) 埼玉県教育委員会編『埼玉教育史』近代篇3巻（埼玉県教育委員会 昭和45年3月）4巻（埼玉県教育委員会 昭和46年3月）参照。
- (9) 『文芸時報』は大正14年から昭和5年までの文壇情報を伝える文芸新聞。不二出版から全3巻別冊1で復刻版<sup>a</sup>が出ている。
- (10) 前注(7)竹長宛書簡に含まれる手記。
- (11) 英語を専攻し女性の地位向上をめざして国際的に活躍する中村道子氏（1919-、旧姓河野）と、浦和高等女学校の中村道とは別人である。念のため記しておく。
- (12) 例えば平井正穂編『イギリス名詩選』（岩波書店\*文庫 1990年2月第1刷）参照。この部分〔第4連〕の平井訳を次に示す。「というのは、その後、空しい思い、寂しい思いに襲われて、私が長椅子に愁然として身を横たえているとき、孤独の祝福であるわが内なる眼に、しばしば、突然この時の情景が鮮やかに蘇るからだ。……」

## 添付写真

写真① イー・エフ・アプタン著、南岡春枝訳『幼児にきかせる日々の教<sup>をしへ</sup>』

写真② 浦和高等女学校『会誌』第六号（発行 大正9年12月25日）

（本学教育学部教授）